

あなたへ 眞実からの伝言
— 感動と生きる喜びを —

平和の礎

いしずえ

交野在住者戦争体験集

第四集



「平和の礎」第四集発刊にあたって：

この小冊子は、

公募に応じられた交野市在住の戦争及び終戦直後体験者の寄稿と聞き取り等を収録したものです。

前三集と共に、平和日本の礎となられた御霊（みたま）に捧げ、あなたを始め現在・未来を生きるかたがたにお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

（会長 可児義明）

目次

第四集発刊にあたって	1
▽寄稿 (五十音順 敬称略)	
奥角 長生 (森北) 戦時中の追想	3
渡邊 芳治 (倉治) 戦後は終らず	5
詩 生きる	8
▽聞き取り (敬称略)	
奥野 穰 (私市) 戦時中の衣食住体験記	10
すみれ会 (森) 戦中・戦後をふり返って	16
奥 美佐子	19
大門 珠枝	21
向井 悦子	22
松宮 季子	25
安宅 喜美子	26
八重尾 光枝	26
大門 静子	28
吉川 佐喜子	31
すみれ会のみなさん	34
▽紙芝居「しってる？飛燕って」について	39
▽写真 平成二十六年度かたの平和祈念事業から	40
交野の平和と戦争関連モニュメントから	42
▽交野市「平和と人権を守る都市宣言」(日本文及び英文)	44
あとがき	



交野市「平和祈念のつどい」で
力強く歌う交野市青少年少女合唱団の皆さん

表紙 「コスモス」は秩序ある宇宙を意味することば。
花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。

題字 渋谷 正
挿し絵 井上 幸子
吉井 寿代

戦時中の追想

奥角 長生(森北)

私は一九三二年三月七日、大阪府北河内郡交野(ここの)村大字倉治一七七八番地で生まれた。

生まれる前年九月に満州事変勃発、生まれた一九三二年三月満州国建国、一九三七年七月日中戦争に突入した。戦時中の思い出を小学校入学時から中学二年の終戦の日まで綴ってみた。

一九三八年四月交南尋常高等小学校(所在地は現交野市役所)に入学した。その時から強力な軍国教育を受ける事になった。全校朝礼で、皇居遥拝、国旗掲揚、国歌斉唱、校長の戦意高揚の訓辞が毎日続いた。天皇陛下は上御一人(かみごいちにん)、現人神(あらひとがみ)、一天万乗の君(いってんばんじょうのみきみ)であり、我々臣民は天皇の赤子(せきし)である。天皇絶対、軍部独裁の政治が小学生にも徹底された。五年生六年生では体罰を伴う非常に厳しい教育訓練であった。

高等科の学生(現在の中学生)が、陸軍少年飛行兵、海軍予

科練習生に志願した場合は、朝礼で本人を顕彰した。又訓練中の卒業生が来校し、講演した。

一九三九年三月、枚方禁野の陸軍火薬庫が大爆発し、人々は逃げ迷い、我々も山へ逃げた。数日間空を真っ赤に染めた。

一九四一年十二月八日、米英に宣戦布告し、太平洋戦争に突入した。八紘一宇(はつこういちう)、全世界を一軒の家のように仲良くさせる)大スローガン下、多くの標語が作られた。聖戦完遂、一億一心、撃ちてしまむ、欲しがりません勝つ迄は、進め一億火の玉だ、等々。金属製品は供出させられ、物資は配給制になり、敵性言語・音楽・書物も禁止された。

小学校の六年間、早朝には出征兵士を見送り、午後には英霊を迎える日が、年月を追って増えて行つた。約二キロの通学路の途中の或る家で、出征兵士の家という銀色の表札が一枚二枚と増え、それが英霊の家という黒色の表札に変わっていった記憶もある。

現在の大阪市立大学理学部付属植物園は、戦時中、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所で、包(ぱお)というモンゴルの饅頭型組立式の家があった。卒業した義勇兵(十五歳〜十六歳)が、私市駅から満州に旅立つ時、我々小学生は最寄駅

(私は郡津)で見送った。

一九四四年四月、四條畷中学に入学した。格別に厳しい教育訓練が待っていた。朝礼では、君が代に加えて第二の国歌と言われた「海ゆかば」を斉唱し、忠君愛国の精神を叩きこまれた。特に配属将校の軍事教練は苛烈であった。

一九四五年三月、満十三歳の男全員が交野国民学校に集められ、海軍士官と下士官の二名が来校し、兵役志願の誓約をさせられた。

一九四五年四月、学徒勤労動員令により、四月五月は陸軍香里工廠で爆薬製造に従事した。当時香里丘一帯は広大な火薬製造所であった。六月から八月十五日迄は松下飛行機製造所で(大東市朋来)木製飛行機の製造に従事した。

一九四五年に入って空襲が激しくなり、昼夜を問わず数百機のB29が飛来した。夜の空襲では、大阪市街方面を遠望すると、燃え上がって真っ赤に空を染め、凄まじいものであった。小学校同級生大北吉次君(城東工業在学)が勤労動員先の工場で、焼夷弾に直撃され、死亡した。帰りの汽車で偶然乗り合わせた星野信弘君(大北君と同工場で働いていた)が悲痛な面持ちで語ってくれた。後年、大阪大空襲展で彼の戦闘帽が展示されており、涙を禁じ得なかった。

我々も勤労動員先で時々空襲警報が出され、その都度対応に追われたが、我々を引率されていた担任の染田一雄先生(津田駅前在住、二〇一一年一〇三歳で逝去)は我々生徒を待避させるのに苦慮された事を思い出す。幸い直接の爆撃を受けなかったが、艦載機(空母から発進する戦闘機)が時々飛来し、超低空で機銃掃射を繰り返した。長尾で父の知人が家の中で壁を貫通してきた銃弾で死亡した。三月十日の東京大空襲、三月十三日の大阪大空襲、三月十七日の神戸大空襲、等々全国の一〇余の都市が焦土と化した。

我が国土は戦場であった。終戦前日の八月十四日、大阪砲兵工廠(現大阪ビジネスパーク、城見町一帯)が爆撃され、京橋駅ガード下に避難した人々が犠牲になった。駅南に慰霊碑があり、毎年供養されている。

そして、八月十五日正午、炎天下の工場の広場で、終戦の詔勅の放送を聞いた。三〇〇万人に及ぶ尊い命の犠牲の末、戦争は終わった。

命の尊さ・平和の尊さを心に刻みたい。日本国憲法は幾百・千万人の尊い生命の犠牲の上にある。戦後六十九年、日本は不戦と民主主義の平和憲法を守り不戦を貫き、世界の国々からも認められてきた。この世界に誇る日本国憲法がいつまでも遵守されることを願って止まない。

戦後は終らず

渡邊 芳治(倉治)

一 国境での戦い

八月九日早朝、国境の空に爆音、「非常呼集」のラッパ。完全装備し兵舎の外に。整列中機銃掃射をあびせられ啞然。日本軍機でなくソ連戦闘機。度重なる掃射に兵舎の屋根は穴だらけに。やがて情報が入り「ソ連軍は今朝未明越境戦闘中」と。戦いはすでに始まった。「わが隊は直ちに国境守備隊に合流、敵の進路を遮断す。」命令は下った。国境の陣地まで三^キ峠を越え全速力で走破し戦闘態勢に。守備隊の指揮下に入り戦いの真ただ中に突入。ビューヒューと唸り飛ぶ来る銃弾、身近に破裂する砲弾、声ならぬこえで何かを叫び倒れる兵士。ぞつとするほどの殺伐たる様にブルツ・ブルと震え背中がモゾツと・・、恐ろしさ怖さに・・ガタガタ・・。塹壕に体が縮みこむ、「直ちに戦闘開始」の叱咤。塹壕より身を出し、ままならぬ指で銃の引き鉄を。盲撃ちの数発でようやく震えは止まり人を狙う。戦いは純な少年をも鬼とする。一日に及ぶソ連陸軍による執拗な挑戦も戦車部隊侵入のため日本軍を要塞(麓より高さ二百五十メートルほどの山)

に追い上げ、日本兵の「一人一戦車地雷抱え込み特攻」封じ込めだった。戦力的に優位なソ連側の戦略に敗れ山上の陣地に登らざるを得なかった。関東軍(満州に駐屯の日本軍)屈指と言われた大要塞も火器類はすべて南方戦線に持ち去られ砲座のみが多数残され、山上をくり抜き分厚いコンクリートで固められた要塞も内部はカラッポ。全くの無防備だった。威嚇射撃が限界の日本軍を尻目にソ連戦車隊は轟音を響かせ満州内部に侵入し山裾も占領された。反撃は試みたものの、その都度犠牲者も多く孤立の状態では無駄死となり悔いを残す事になる。と、「作戦上当陣地を撤退、牡丹江方面の第二戦線にて軍主力と共に反撃する」、反撃の名目で陣地を撤退(脱出)することになった。撤退は戦う(全滅)よりも至難の業、昼は密林に身を隠し道なき山々を迂回する夜の強行軍となるは必定。要塞には兵士と共に山上で玉砕と、守備隊営外居住の将校の妻子も。塹壕での防戦を交代しお世話をし「一緒にね」と、ローソク灯し手を取り合って約束したときの優しい眼差しは、故郷のお母さんのようで何年ぶりかの甘えに似て荒んだ心も和む。二日目の夜半に隊長と将校が来て「お前らも大日本帝国軍人の妻であり子である。すでに覚悟は出来てると思う。軍は今夜半過ぎ作戦上この陣地を撤退する。一命を大君に捧げてる今日、この作戦に協力してほしい。その為にお前らは、我々軍人の足手まといにならぬよう、この場所で死んで貰う。」何たることか。軍人が生き残る為

婦女子を……。余りにも理不尽。十七歳の心には受け止め難く、はちきれる思いにやるせなく、慄然として黙礼のみでその場を離れざるを得なかった。手りゅう弾の破裂音、重傷者を含む三十余名の命は遂に絶たれた。

合掌

銃声が止んだ真夜中、山上を脱出した。しかし目的は反撃(戦う)の為であった。

※追記 お母さんとの約束、心のシヨリとなり六十余年過ぎしも戦後は終わらず

二 ソ連軍との激しい戦に敗れ

陣地撤退(脱出)に当たり国境守備隊と貨物廠勤務隊は再編成され義勇隊三十数名は、指揮班に編入され数名の下士官の下、山中で通り道あけ(先導)と、後続隊への連絡、戦傷者の介添えを命じられた。

若いとは言え未成年の私達義勇隊には余りにも過酷な役だった。真夜中の裏山、急斜面の自然林での足場づくりは容易ではなく、戦傷者と肩を組み、歩けない人を担架に乗せての介添え、後続隊への伝達の大役に、しらむ頃には戦傷者共々くたくただった。「足手まといになるから置いて行ってくれ」と、手を合わせられ返す言葉すらなかった。

明けると陣地脱出を知ったソ連戦闘機が飛び、谷陰や岩か

げに潜み夕暮れを待つしかなかった。夕方近く戦傷者の先任者より「軍人として潔い自刃を」との、上申があり受け入れられた。戦いと体力の限界に荒んだ心はこれすら当然のように思えた。一刻も早く牡丹江方面の第二戦線に駆けつけて反撃?と。

陣地脱出からの食物は乾パンだけ。日中は行動できず水もなく、茨の道での強行軍に、すっかり疲れた老兵隊は落後者も多くなった。が、声をかけ手を差し伸べる余力さえ無かった。

三夜過ぎの夜明け前に、原始林を抜け、左右が小高い山に囲まれた兵陽鎮に出た。牡丹江に向かうには川を渡らなければならぬ要所、兵陽鎮の町を通り抜けた途端、照明弾が打ち上げられブシューブシューと迫撃砲の襲撃。前方からは戦車三台が、重機関銃での絶え間ない乱射。「散開」・「散開」の号令。だが負け戦、旧式歩兵銃のみの日本軍。迫撃砲砲弾が炸裂する度毎に疲れきった兵隊は右往左往するばかり。そこを後方の町から二、三十名のソ連兵が「マンドリン」でドドドドドド・と撃ってきた。(マンドリンは自動式小型銃で小脇に抱えられ近接戦用、大きさも形もマンドリンに似てる、日本兵が初めて見た新兵器でマンドリンとなづけた)隊列の後ろからの銃弾にバタバタうめき声をあげて倒れる兵隊。突撃し銃剣で、マンドリン掃射を続けるソ連兵を突き刺している兵隊もいた。(近接戦での自動銃と槍との対決)

負けずにと、必死に引き金を引いていた。が、ふと周囲を見ると、生きているものは僅かとなっていた。迫撃砲弾は絶え間なく炸裂し物凄い土砂が舞い上がる。このままでは死んでしまう。咄嗟に、「逃げよう」とにかく逃げよう。走れるだけ走って「今だ」と、ひらめく。銃剣（護身・自尽用）と水筒だけを持ち百メートル位離れた右方向の、トウモロコシ畑に一目散。無我夢中……。耳元近くを通る弾丸の通過音だけが不気味にきざみこまれる。やつとのおもいでたどり着き転ぶように地に伏した。喉はカラカラ、そのままの姿勢で五十メートルほど前に移動したら五、六名の仲間（義勇隊、兵隊）に逢え、ほっと一息。だが此処では危ない。伏せた状態で相談し、ともかく視界の良い所まで移動することにした。広いともろこし畑を腹這いで泥だらけになって抜けると湿地帯が目前に。安堵の溜息、良かったアー……。助かる……。？

戦車は湿地帯に入れないし湿地帯を超えれば川、なんとしても逃げなければ。近くでマンドリンの掃射が。ソ連軍の敗残兵の狩り出しが始まった。空からも戦闘機が。動けない。敵に身を潜めてじっと時を待つことに。身近のともろこしで乾きと飢えを凌ぐことができた。

陽が沈む頃になり、ようやく銃声は止んだ。日暮れを待ち湿地帯を泥だらけになって強行突破。川も首まで浸かり、ソ連軍に見つからずに渡れ、逃げきれた。生きる、生き抜く、どのようにしてでも。この気概に運も付いてきた。



全滅に近い戦いで、陣地脱出（六百人）の三分の二以上の兵隊が戦死したと思われる。敵面逃亡・戦線離脱。ともかく生きている、生き残れた。だが前途は多難。明けるまでに山に入らねばと休む間もなく行動に。悲惨な逃避行は始まった。

※昭和二十三年十二月シベリアより帰国直後の手記から

生きる

渡邊芳治(倉治)

訓練不足の老兵を補佐

十六歳 身に余る重き任務

国境に 爆音響き戦いに

敵陣見える塹壕 飛び交う銃弾

身の毛もよだつ恐さ 銃持つ手もままならず

人差し指離せぬ盲撃ちに

震えは止まり鬼となり 人を射る

いくさは十七歳の心をも奪い取る

戦い破れシベリヤ捕らわれの身

ノルマ ノルマの強制労働

腹ペコの土木作業 煉瓦作り

たんぽぽ あかざ飯盒で炊いて

味なき おしたし腹の足し

小さな幸せ見つけて生きる十八歳

容赦なきノルマに 傷つき病院

金髪美人の軍医 大尉さん

純な瞳モンゴル娘の看護婦さん

人種違えども 親身な看護

村の駅 十四歳まだおさない

親許離れ故郷捨てる 不安と寂しさも

小旗の波 歓呼の声に打ち消され

君のため国のためにと意気高揚

初めての感激に 血は湧き肉躍る

晴耕雨読 銃と鋏とる過酷な訓練

焼け付く夏 厳寒の冬

若さと情熱で立ち向かう健男児

あやめ しゃくやく花と咲く

雄大な自然 山野の美しさ

大陸に生涯をと 夢見る十五歳

軍主力 南方戦線に移動し

備えなきソ満国境に狩り出され

銃剣とつて兵士と警備につく

現地(満州)での根こそぎ召集の

九死に一生 後遺症残るも
 ダモイ叶う 忘れられない十九歳

少年の日の夢 無残に破れるも

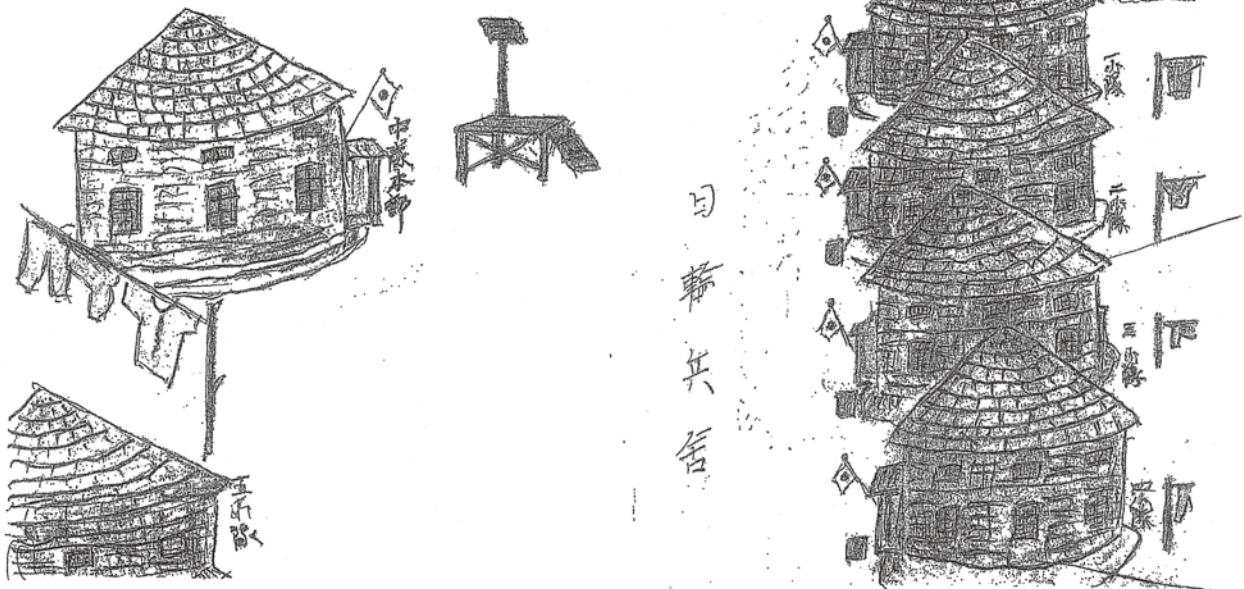
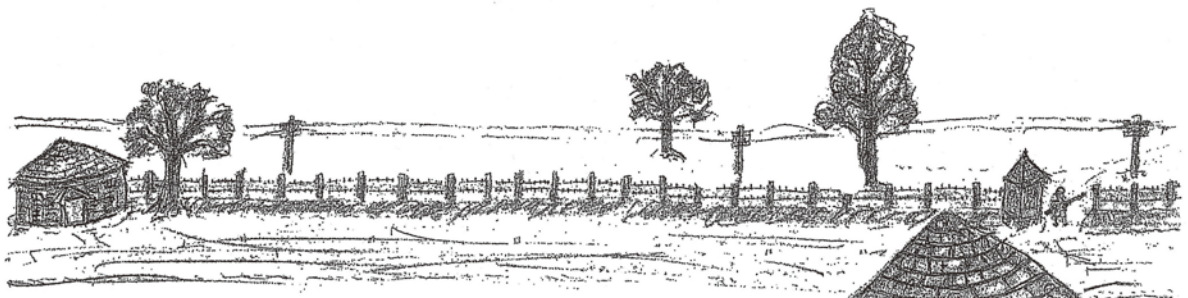
苦渋 生涯の糧とし六十余年

平和を祈念 生きる

(注) ※塹壕…野戦での防御施設。溝を掘り、その土を前に積み

上げたもの。

※ダモイ…シベリアからの帰還兵が持ち帰った言葉。帰国、
 帰還。



戦時中の衣食住体験記

奥野 穰(私市)

生い立ち

私は、私市に住んでいます奥野穰と申します。生まれは、昭和四年九月八日で、今年、満八十四歳を迎えました。まずはじめに、私の生い立ちと家族について、お話しいたします。兄弟は、一番上が奥野平次で、明治四十五年生まれ、次に、大正三年、五年、七年、九年、十二年、十五年。昭和四年生まれの私が一番下です。大正十二年に女の子が生まれてすぐに亡くなって、男ばかり七人と、両親とで大きくなりました。その昔は大層羽振りがよかったようですが、私が子供の頃は常に貧乏で、小さい家で暮らしていました。一番上の兄が親代わりで、私たち兄弟を大きくしてくれました。

「衣」について

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争と言ってきた第二次世界大戦が勃発し、昭和十七年に被服の統制が始まりました。

た。

説明しますと、子供が五人おるなら、一年分の五人分の券(衣料きっぷ)が渡るんですね。パンツは一枚買ったら三点とか、シャツは五点とか、パッチは十点とか。やんちゃな男ばかりで、私らが寝静まったらおかあちゃんは綴くり。三人目くらいは兄貴のお古が当たるんですけど、七人目の私になつたらもう擦り切れてないもんですから、泣く泣くサラで買ってくれました。そういう意味では、私は貧乏の中でも一番恵まれた生活をしていました。

この頃に結婚する人はよその衣料きっぷの残りをもらって、反物やいろんなものを買って嫁入りをしたと聞いたことがあります。衣類についても非常に苦労しました。

国民学校になったのは昭和十六年ですか。その時衣類がなかったの、堤防に生えている「チョマ」という木を学校から鎌を持って刈りに行きました。この木は繊維が非常に強いです。その木の皮をめくって、繊維をとって干しといて、繊維工場に送ると、それが服になって小学校に着か入るんです。

戦時中、私らの先生は背広の長ズボンを切って、みな半ズボン。長ズボンをはいて怠けたことをしたらあかんという。それでゲートルを素足のままで巻いて。靴がなかった

んで、下駄を履いて。軍隊が全部持って行ってますから。それで我々はわらじばかり。素足で靴下を履いて、わらじのところにかまぼこの板を打ったんです。すぐに減るから。釘で打ったら上に釘が出てくるものですから、パッキンを入れてカラコロンいわして。それから朝授業の時、寒さで手をこすってやらんことには拳みたいになって開かんですわ。それで何かの用事で職員室に呼んでくれないかなあ、と。職員室は、先生は教えないといけないので、石炭ストーブをたいてあるんですね。先生はいいな。その暖をちつとでも一瞬とるということですな。それは今の事を思ったら、雲泥の差です。寒いことに耐えていけるといふことには非常に強いんではないかと思えます。どんなことでも耐えていくという。毛糸の服を着ることがない、ただもう学校の黒い制服を着てるということでした。衣類についてはそんなもんでした。

「食」について

昭和十二年七月七日にシナ戦が勃発。その時の食糧と言いますと、今とレベルが全然違います。切込みのものも肉を食べて、おかあちゃんが菜っ葉を引いてきて、それを食べるというように、食のレベルがものすごく低かったです。

昭和十五年には米の統制が始まりました。子供の頃、家に帰ると、貧乏人やのに、庭に俵が五つ積んでありました。私が親父に「なんやねん今日は。いつも一俵しか買わんのに。」と聞くと、父は「これからコメが配給制度になる」と答えました。これから大事に五俵でなんとか息をつないでいくということでした。

おかあちゃんに小遣いをもらうのは一銭でした。一銭で何が買えたかというと、どんぐりあめが四個、栗饅頭は三錢。栗饅頭はとでもではないけど買えなかった。三錢というお金は盆と正月しかもらえなかった。私のいとこが、家の針箱にあった五十錢を盗んで、私に栗饅頭とかをおごつてくれるんですよ。おかしいなと思ったら、おばさんから「こらー！」と追いかけられたこともありました。昔の五十錢は大金でした。今だったら、子供が何千円もいっぺんに親の金を盗ったということでしょう。

昭和十六年頃から、百姓は米を作っても供出する方が多かったです。軍隊がみんな吸収していたということです。私は海軍で見ましたけど、倉庫にもうそれはごつつ積んでいました。軍隊が進行するための補給ということで。甘いものとか食糧類は全部確保していたんですね。百姓が自分のところの食う米もないのに軍隊はみんな持っていく。これや

な、と兵隊に行ったとき思いました。羊羹でもなんでもありません。羊羹は、特攻隊が明日爆弾を積んで最後に攻撃に行く、もう帰ってこれないので、そういう人が食べる。百姓も自分とこやったら、と思って供出されていました。私は私部ですけど、近所に百姓がおって、お金持って、米売っておくれへんかといっても、売ってもらえませんでした。そやからその時期、物々交換が始まったんです。物々交換したから、田舎のおっちゃんモーニング着てたんです。兄貴が、そんなもの買わんと、頼ったらあかんて、きつかったんですよ。命つなぐのに青团子でええやないかと。終戦後は、兄貴が子ども連れて帰ってきたので、子どもが十一人おりました。終戦の十一月に十七歳で兵隊から帰った時期に、私はパンを作りました。もちろんパンなんて売ってませんわ。木の箱を作って、銅版とブリキ板に電極をつなぐんですよ。小麦粉を練ったものにちよつと炭酸も入れて膨らすんですね。そればかり食ってました。それで、兄貴に働けと言われて、まず自動車の助手になりました。持っていく弁当の米は、おかあちゃんが大事に大事にして、手に入った一升の米でも、あわのつなぎに、食べれる程度に入れるんです。箸を持っていったら、ばらばらと落ちるわけです。白いコメを食べるといことは、戦後もしばら



く二、三年はなかったですな。終戦時、平次と信三兄貴はえらい痩せて、栄養失調やと思いました。

高等小学校三、四年生くらいの時、落穂拾いに行きましたね。一斗二升ぐらいとれたんです。交南尋常高等小学校に裁縫科という教室がありまして、全校生徒が九十八人やったと思う。その時でした。今でこそ耕運機で固くてもいけませんけど、子どもが土のついた落穂を拾うんですよ。それを握り飯で食べさせてもらったことが何回もありました。戦争に負けた割に食糧事情は早く、食べ物に苦労はしましたが、二、三年で取り戻して、時の政治家は偉かったというのを、大人になってから考えますね。

「住」について

生まれた時は小さい家で、ご飯食べる所は二十ワット、最高四十ワット。六十ワットの裸電球つけてたところは無いですね。その時分は定額灯と従量灯。朝六時に消えて、晩の五時に点くのが定額灯です。一日ついているのが従量灯。私部では二〜三軒でした。子供の時分に、ここは昼でも電気がついててええな、と言っていたんです。冬の朝六時と言ったらまだ暗いでしょ。はよ食べないと飯がどこかわからないっていうことになるんです。六時にパッと消えて、

晩の五時にパッと点く。それで勉強するのはお膳で、二十ワットの暗がり勉強していた。だいたい生活はそんなことでした。

召集の様子

大阪府から何名兵隊を召集せよ、という達しが来ましたら、交野の兵事係から召集され、戦争の訓練のため軍隊に行くんです。大阪府で、七人兄弟で六人行ったというのが私のところ一軒。名誉な家でした。親父は表彰ばかりされてましたが、母親は苦労しました。私兵隊に行くときに、泣けましたよ。兄貴は「帰ってくるという気持ちで行ったら、戦争なんてできない、がんばれ」って。だから私は泣いた。宮さんでご挨拶をして、国防婦人会の人が、元気でいてください、と挨拶してくれはる。兄弟六人いて、九回行ったり来たり。私は何もわからんと行っただけ、母親は見に来てつらかったでしょうな。

母親は子供八人も産んで、偉い人やったと思います。男七人もおったら、洗濯ひとつでもえらいことです。二時間ぐらいやつりました。手がかかとみたいになってました。洗濯機もなかったさかい。今の人にやれって言っても、あ

の真似は出来んでしょう。自分でものすごく感謝しております。

志願兵時代の話

長男の奥野平次は明治四十五年生まれですけど、その兄が、お前も志願して行けっていうことで、私は真剣に考えておりませんでした。兄貴は、お国のためならという気持ちがかこびりついている軍国主義ですな。兄弟はみな戦争に行きました。兄貴はみんなの面倒見てくれたから、信用していた。私自身はそんな深い意味はなく、はよ飛行機に乗りたいてっていう気持ちはありましたけど。

私は十六歳で志願して、軍隊に入りました。八か月教育を受けて、二等兵ということですが、戦争は実際にはしておりません。

兵隊では楽を一つもしておりません。私は叩かれどおしで、尻に大きなあざが二つできてました。帰ってきたときになかなか取れなくて、母親が泣いておりました。茨の道を歩いてこそ強くなるのであって、平坦な道だけではあきません。そんな目に遭って、弾飛んできて死んでもいいというところまで行ったから強く、根性がつきました。

終戦後

終戦になったその日に海軍はみんな拳銃と小銃をもらいました。最後の突撃をするねんな、ということ、もうこれは天皇陛下が言わはったら、私は死なないといけないのかと思いました。第一回の復員が八月二十三日でした。私は志願兵ですから、飛行機のエンジンと機体をバラして、アメリカ軍に衣類も飛行機も目録をつけて渡して、それで帰ってきたんです。大分県の佐伯航空隊ですか。警備をして、十一月三日に帰ってきました。

私は、昭和三十年に結婚しました。が、「絶対金を借りるような根性やったらあかんぞ。飯食えんかったらおおかゆ食え。」これは兄の教訓です。

自慢やないけど、学校は兄弟全部出てません。（兄貴は夜学は行つとります。）私は、先生に中学校へ行けと言われてと家帰って言ったたら、兄貴に「あほなこと言うな。仕事行け」て頭どつかれて怒られた。学校は高等小学校しか出ないから、大学出に負けん仕事を何か見つけなあかんと、いうことで、昭和三十六年、得意を探して電気事業会社の第一期生として現場に入りました。月給は、朝六時から吹田の工場に行つて八千七百元。所帯持ったら一万二千元でした。季節労働者の採用に全国回つたりして、四十二年間

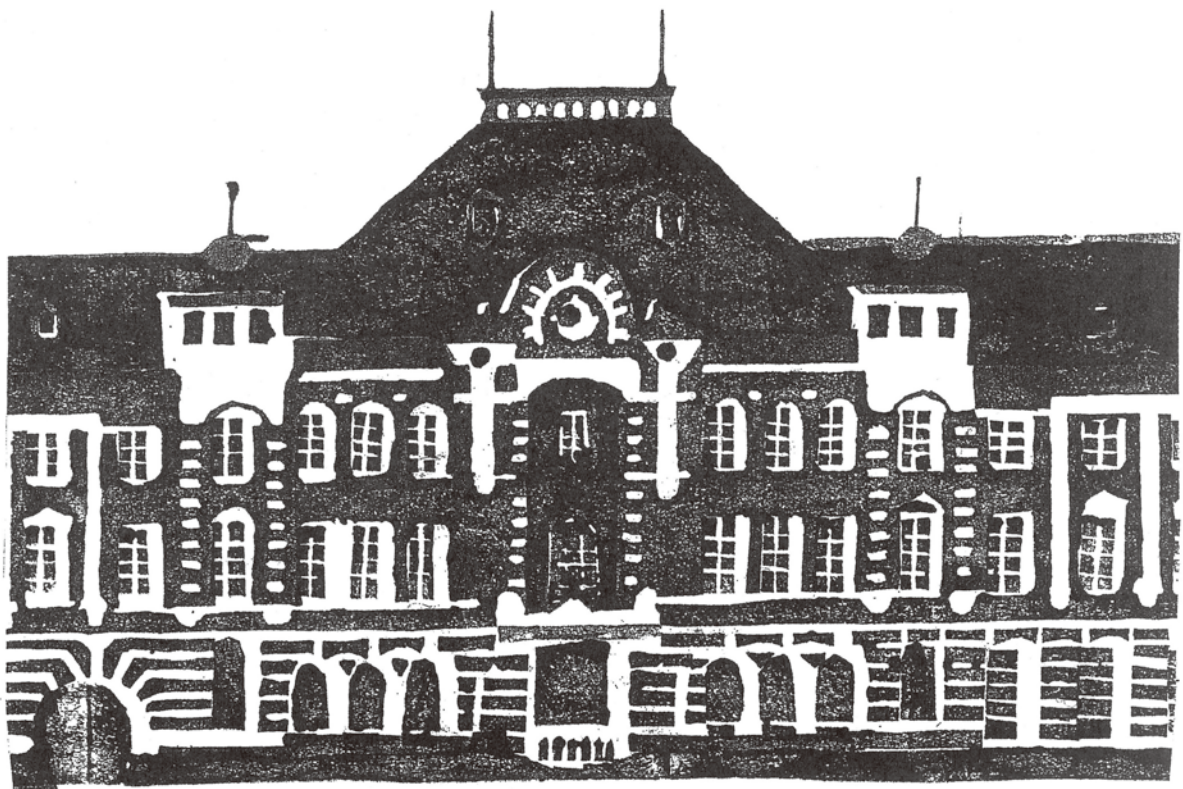
七十二歳まで勤めたんです。退職後は交野市の文化連盟の役を十三年やらしてもらって、体育協会の理事もやらしてもらいました。偉くはなれなかったけど、兵隊で絞られたことや、兄貴の教訓が役に立って苦勞の末に素晴らしい人生を送りました。

後世に言っておきたいこと

戦争の中で育ったさかい、食うもんも食わず、着るもんも着ず、質素な生活をして、それに耐えてきたという経験をしましたが、今はどんなものでも買えます。今の若い人、子どもさんやったら、「オッチャン時代違うで」の一言でお願いします。「おっちゃん、そうやったんか。食べるものも食べんと、おっちゃん八十四歳まで元気やな」と、私の言ったこと、頭の片隅に十分の一でも体験したものとして頭に入れたいもろて、「おっちゃんに、こんな文章読ましてもらたな」と思ってもらいたいですな。ちよつとでも頭に入れていただけたらなという私の思い、私の願いです。

【聞き取り】

日時 平成二十五年九月二十日（金） 十三時半
場所 交野市役所 本館三階 第一委員会室
出席者 可児・水上・玉井・住井



東京駅

戦中・戦後 をふり返って……

(すみれ会 聞き取り)

奥 美佐子

戦争の記憶

私らが一番におおたわな、爆撃に、逃げたよ。こうかぶって、逃げたよ。一生懸命に逃げたよ。

不思議やね。死人には一回も会ってないんです。そこに死んでほるっていうねんけど、回ってもね、見たことない。見てたら、今、生きてられへんわ。こんな長いこと。

モンペ

私、昔、昭和六年ですわ、小学校六年卒業して、女学校二年まで、八年間、大阪の海老江にいて、それから野江に行ったんです。お父さんのな、白いズボン潰して、モンペにして作って、えらい怒られてなあ。ここに、確か白のズボンがあったのに。「はい、黒にしました」って言ったたら「誰がしたんや」って「私」って「あほ」って言うて怒られたわ。「なかなかあんなズボン買われへんの」ってね。「許可なしでよう染めたな」って。「どれで染めたん？」「鍋で染めた」「又その鍋も使われへんでしょ」って怒られて。二回怒られたわ。

空襲警報

家は京阪の線路沿いです。天満から北浜まで爆弾落ちて、学校から帰りしな、線路の上をずーと歩きました。そしたら、きれいなボールペンとか、鉛筆とか、万年筆とか、落ちてるんです。それ拾うたら、「バーン」って爆発するから、絶対拾うなって言われているから、綺麗から拾いたいねんけど、爆破するからあかんねん。それ見ながら、ぐるっと回って、線路の上を通過して家に帰りました。空襲警報になると、線路の上に行くと、枕木だけで線路があるから、下見えます。そういうところの横手に、土手があるんです。その土手に仰向けに寝て、B29が上飛んで、それを見るわけです。今通ってるんやな。もうちよっと向こう行くまで、寝てなあかん。起きたらあかん。私よう狙われたわ、学校帰りしなに。土手で寝んことにはまともに撃たれるもん。ほんで土手にダーンと仰向けに寝んと、どっち向いて飛行機来てるか分からへんや。だから土手でようこうやって寝たで。それも怖いな。ほんなら、上からね、ウーって向こう行くんや。通り過ぎたなって、ほんなら、ぼちぼち起きて歩こうかって。

防空壕で

大阪は、都島の方が焼けたんです。全面的にね。私は野江に居たから、隣で区でね、町ですわ。そしたら、都島からこっちへ、来はるんです。自分とこの家が焼けて、助けてくれってね。私ら

防空壕に入っているでしょ、ほんなら、若いから一番奥に入れられるんですよ。ほんで「奥に入っとれ、奥に入っとれ」と。はじめはその意味が解らなかつた。奥に入っていたら、向こうから女の人が来て、声だけ聞こえてるんですけど、顔は見えてないです。それでここから出たらあかんって言われて、こうして大人の人にハツと手でふさがれるから、なんでやるなって思つて、黙つてこうして聞いてたら、赤ちゃんをおぶつて来てはるんですよ。赤ちゃんの首、手、足、全部ないんですよ。もう爆弾でね。お母さんがおぶつた時は、自分の子どもだからちゃんと背負つて帯で結んでるんですけど、一生懸命歩いて、歩いて、道を来はるでしょ。その間に、ボンボン爆弾落ちたかして、なんか当たつたです。それをみな子どもがね、風で飛んでしもうて、首、手、足がないんですよ。体だけくくつてはるんです。

そんな人があつてね、ここから見たらあかんって言われるのはそれやつたつて、あとから解つたですよ。

せやから顔は見えないけど、その女の人が助けて下さい。この子を奥に入れてくださいって言うてはるのんは聞こえるわけですよ。ね。せやから、奥の方で、「怖いな、怖いな」言いながら、こうやつて座つてるわけですよ。

そう云う事もありました。

生き埋めを掘り上げる父

野江の駅前に間違つて一弾、爆弾落ちたんですよ。その時にその最寄りの駅にお酒屋さんがずつと、あつたんですよ、何軒か。その人が生き埋めになったんです。うちらは駅の近くやからね、すぐにね、その「生き埋めを掘り上げてくれ」って言われて、うちは、私と父が家に残っていて、あとは全部疎開しましたんでね、父が行つたんです。「行つてくるわ」つてはじめ勢いよく言いはつて。帰つてきたらこんな顔して帰つて来はるからね、どうやつたんかなつと思つたら、結局、もう出てきますからみなさんもつと頑張つて掘つて下さいって言いはるからね、やつてるんやけど、手出て来た、ほら足出てきたつてなつたらね、自分も可哀そうと、もう怖いのと両方で、反対向いて、掘らんと、こうやつて見たら、一人だけ帰つてくるからね、「どうしたん」つて言つたら「もう出て来はるねん」つて、よくわかれへんから「なんのこっちゃ」つて言つたら「僕は見ていられへんかったから、帰つて来た」つて自分は防空壕へ入つてるねんね。ほんな、あほなつて思つてね。私ら分からんけれど分からんにね、「あー怖いねんなあ、空襲つて怖いねんなつて」小学校の時分やから十二三歳ぐらいやね。

疎開

うちはね、私より二つ下から疎開になつたんや、妹達はみな母方の田舎に疎開したんやけど、私は疎開できへんから、父と二人

残ったんです。母は小さいの連れて行かなあかんからね。

B 29

B 29はすごいな。ブワーって飛んできて、ほんまに怖いですよ。いつ自分の方へ落ちてくるか、分からへんしね。うちの母親が田舎でね、井戸水汲んでて、おばあちゃんらが、「空襲やから、入りや」って、言ってるのに、「もうちよつとやねん、もうちよつと」て、お米といでたんですって。そしたら上から、バーンといかれたんですよ。まあ隣に落ちたから死んでないけど、直接当たってたら死んでるところでしたわ。ほんでその音聞いて、びっくりして家の中に入って、「向こうは山の方から見てるけど、私ら怖かったったわ」って。私「遅いわ」って。大阪から、いつも、土日に行くんですが、上の山の方から大阪を見てると、バアーと火出で、またあそこも焼けてる、ここも焼けてるなって、よう見てました、って、そんな話、聞きました。

食べ物

私は、そうして半分田舎があつたから、食べる物には、不自由してないんです。おばあちゃんところ行つては、お米貰うて来て。お米の中に卵を入れて持って帰つてきて、それをたばこや酒やらにお父さんが変えて。ほんで自分ら食べるのは、ちよつとや。ほんで又、土日に行つて貰うて帰るから、私不自由してないんよ。せやけど、近所の人見てたら、食堂が空いたからゆうて、行きは

るから、何してはるんかなって思つたら、なんかお粥さんに並んではるとか、何やらに、並んではるとか、で。私は半農でみな作つてましたから。

物々交換

お米さえあつたら、物々交換出来た。うちらのおばあちゃんよう物々交換して、私のとこへ流れてきたもん。とにかくあるもんを持つて行つて、お米に代えてもらう。食べ物に代えてもらうのは当たり前のことやった。せやから、着物なんていっぱいあつたわ。町から持つて来はるから。私、よう貰うてきたもん。着物かて、矢印の、長い着物が流行つてた。うち女ばかり三人いてるからあんたとこやろうと思つたら、三つこしらえんと、ならんって。

千人針

みんな裸足で、野ざらしで立つて寒ぶいのにやらされたわ。あんなもん何の役にも立たんわ。ほんまに。朝の早ようから、晩の遅うまでな、「お願いします」「お願いします」言うて、頼まなあかんから、してもらわなあかんから、綺麗にピシーってやらなあかんねん。

終戦後

終戦後はちよつと怖かったですよ。北浜のね、黒人に追いかけられましたからね。証券会社に、アメリカの軍隊が、立てこもつ

ていて、怖かったですよ。せやから出てくるんですよ。黒人が。そこ通る時は、ちよつと小走りで走って逃げんとね、絶対追いかけて来ますわ。ほんで靴持ってたね、ダーつと天満の駅に走りこんでね。そら、どんだけ、走ったか。それで公衆電話に入ってたね、会社の人呼び出して、「誰か、迎えに来て、また今日も追いかかれた」って。ほんで家まで送ってもらって、よう帰ったわ。捕まえられたらしまいですからね。あれが怖かったですわ。



大門 珠枝

食べ物

不自由しました。私んとこ農業でしたけど。父が招集で満州に、最後はシベリアにいました。農家でもみんな父親は、居てはらへんでしょ。年寄りのおじいちゃんとおばあちゃんと、母と私ですわ。全部ね、作ったん。田んぼや稲は、年寄りばかりやし、出来へんでしょ。いいのん出来へんから全部、供出せなあかんかったんです。せやからね、なんぼ農家してもね、お米、不自由でした。

私は寝屋川の池田というところですけど。今、摂南大学あるところです。交野はね、土地きっちりしてるんですね。それに広いらしいですわ、面積がね。せやから、交野はいいなって、じいちゃんが言っってはりましたわ。供出すんのかてね、私とこの村はキチツとしてないって、年寄りばかりやから、おじいちゃんとおばあちゃんばかりでしょ、そんないいのん出来へんから、全部出さなあかんかった。なんぼ農家しても、不自由でしたわ。

今、あの大根でも、みな葉っぱ取って、放つてあるでしょ。今だに私、もったいないわと思うわ、ほんまに。

たまねぎ

うちのおじいちゃんが、松下幸之助さんに、たまねぎのぼんさん取った後のんを分けて欲しいと、言われてね、ナショナルの会

社へ持って行ったって言うたはりましたわ。ほいでね。松下幸之助さん、ジンベ着て座ってはったわて。葱や、葱の上やなしに、下のね、まだ根あるでしょ。根や。それを分けて欲しいと言われてね。食べはるんですやん、食料難やから。ほいで近所に頼んでね、よう儲けはって。私、寝屋川に住んで聞いていたわ。おじいさんが主になって、みんなに勧めはったって。それが寝屋川まで伝わってきたわ。

父

父は昭和二十三年にシベリヤの抑留から帰って来はりました。行方不明でした。父は私が小学校二年の時に招集で行きはって、帰って来はったんは中学一年の終わりです。

学校・飛燕の話

学校行けませんでした。私らね。学校に軍用品いっぱい入ってたから、学校で勉強出来なかつたのよ。お寺で勉強してね。お寺に焼夷弾落ちまして、お寺も前の家も、全焼でした。学校がなから葛原までお寺に勉強しに行った。ほんでそこへ落ちたんです。出口と寝屋川、私池田ですからね。変わらへんから、見えただでしょうね。寺小屋へ勉強しに行ってたでしょ。その時空襲警報なつたんです。帰る道ね。昔やから田んぼばかりですもん。何にもないんですもんね。ほんでね、小屋が一つね、農小屋建ってたんですもん。ほんでそこへ皆ね、入ったんですもん。そした

らお寺の上ね、すごい五台ぐらい、ババーツってあの辺一带、飛行機飛んでたんです。爆撃にね。ほんでね、ふつとこう向いたら、一機火噴いてね、墜落していくのん見えたんです。それが四条畷の方に墜落して見えたからね。みんなそれを敵の飛行機やと思つて喜んで手叩いてたらね、後でね、だいぶ経つてね、故郷講座行つた時に、星田の辺を歩きましたら、その飛行機墜落した所でん。

ものすごく、ショック受けました。今いきいきランドにある飛燕の話です。

私は今でも見てる様です。忘れられません。みんな敵の飛行機やと思ってるから、手叩いて……。ワーツと墜落して。

河内弁

私ね中学校、私立行きました。終戦二年目です。その時、学校は標準語でしょ。私、寝屋川で河内弁でしょ。そんな汚い言葉でもないんですけどね、みんなに笑われてん。それで、絶対、学校では河内弁使いませんねん。標準語。私いじめられましたんよ、ほんとうは。みんな大阪の大阪弁でしょ。先生方はお茶ノ水や、東京の学校出てる方、多いでしょ。そしたら標準語でしょ。せやからもう、みんなに笑われた。田舎の子やって。寝屋川やから。一切学校行つてる時は標準語でした。それでね、学校卒業して大人になってからね、やっぱり言葉ね、河内弁、寝屋川とか枚

方、出口やら、淀川筋は京都に近いです。

終戦の時

負けるなんて、ほんと思いませんでしたね。



向井悦子

父の出征

私は昭和十五年生まれで、一歳の時に父が出征しました。父は、フィリピンに、六年行って、戦争が終わってから、昭和二十一年か二十二年に、私が小学校に入学する時に、帰って来ました。そこから、私が一歳で行って小学校一年の時帰って来た。せやけど、お父さんや、って、言われても、なかなかお父さんって、呼ぶことが出来んね。はよ、慣れるように、物、持って行くように、用事を言われるんですけどね。直接、顔見ないで、横向いてね。家は、今は京都の八幡市になつていますけど、そのころは木津川の傍の流れ橋、岩田で、農業してましたけど、父の出征中は、母とおじいさんだけだったので、なんかその頃、若い人が手伝いに、来てくれてはったみたいです。はつきり、よう覚えてないけど。

入学の時

私入学の時、ランドセルはあつたけれど、赤いのんじやなく、茶色の男のやつた。靴、靴がね、右やったら、右ばかりやねん。左右がないねん。同じ。それをはいて行つたん覚えてるわ。

私は終戦後の入学やから、国民学校か、尋常小学校、二、三人で、尋常小学校があつてそれから国民学校になった。

私、一月一日生まれですもんね。ほしたら普通ね、四月生まれからの名簿やねんけどね、一月一日やからね、名簿が、一番やつて

ん。それだけ覚えてるねん一年の時。男の人のおる中、皆の中で一番やってん。名簿。

駐屯部隊

高校の頃、駐屯部隊って、なんか、まだあったと、思いますねん。大久保、宇治の。私、高校でも、怖かったわ。城南通ってたね、そこで門番しているのが、そんな人やったわ。もう怖かったもん。



疎開

昭和五年、大阪府下、大阪市街地生まれ。小学校の時に、戦争が始まって、だんだん激しくなってきた、下の妹が疎開する時に、父だけ残して一家で疎開したんです。奈良県の橿原神宮の一つ手前の畝傍御陵前というところです。そこで妹が、小学校に、私は女学校に入って、それでもう終戦になって。私の一番下の弟がそこで生まれたんですね。終戦で、食料難で、まあ其の時に私も色々病気にかかってね。栄養不良で鼻血が出て、止まれへんようになって。昔は車あらへんから、リヤカーに乗せられて、奈良県立医大か何かに。そしたら空襲警報が鳴って、上を、B29が。参道の松の木とか、いっぱい植えてる所に、避難してね。機銃掃射があるから。そしたらB29が何を見つけたか知らんけど、急降下して、バーバーって、しているのんを目の当たりに見てね。そうゆう風な思い出は、あるんです。せやけどあの音だけは今でも忘れられへんね。B29のあのゴーっていう音は。

京橋の爆撃

京橋の方が爆撃されて、その西の空がものすごく赤になって、ほいで雨が降って来たが、雨が汚かったっていうのん覚えてるのよ。京橋の方でも、橿原神宮のとこまでねあの爆弾の音、もの凄かったね。あの時の爆撃、本当に凄かったわ。

松宮 季子

柳本飛行場

土のうこう、運んで勤勞奉仕に行きましたわ。柳本の飛行場に。柳本飛行場行つてた時、予科練の学生いて、飛行機は出てるけど、全部草でね、ずっと、隠してあつたわ。その飛行機、ほんまに、おもちゃみたいなん。あんな飛んでんな。青い色で塗つてあつてね。そして日の丸があつたわ。それを覚えてるわ。予科練なんか志願して行つてたんやもんね。もう本当に昔のことやから、だんだん忘れていくわ。それでね、その水飲み場、言つてもね、全部コップじゃなしにね、竹のコップやつたわ。竹を切つたんコップ代わりに使つてたわ。

学校

鉄兜の後ろに、なんか垂れているのあるでしょ、あれ学校で縫うてましたわ。だから勉強なんて一つもないわ。それと薙刀でこゝろ、竹にワラつけて、それをつつく。運動靴なんか買われへんかった。売つてなかつたもんね。

先生方もみな、出征で行つてたもんね。ほいであの出征兵士を送る歌、歌とうてね、送つてたね。

玉音放送

負けるなんて思つてなかつた。絶対勝つと思つて、私ら信じてたわ。放送もちやんと覚えてる。樫原神宮でおうて、みんな表

へ出てね、御陵の方に向かつてね、泣きました。本当に泣きましたね。(頑張つたのに、あんなだけ頑張つたのに)と、思いましてん。(ほんとに最後まで食べんとね、頑張つたのになあ)と、思いましたよ。又、あんなだけ連勝連勝つて言うてたもんね。

終戦

終戦になつて、家に帰つてみたら、もう雨戸も箆筒も何もないのよ。父一人、暮らしてて、もうどっちみち、焼けるもんやと思つて、色々壊していったらしい。帰つたら、何もあれへんかつたわ。そして食料難が始まつたのよね。そしたら母が肋膜炎になつて、体悪くして、やむなく、近所の人に、この着物とこれ持つて、連れられて、お野菜とかなんやか、買いにやらされて、学校に行つてる暇なんかない。私、学校は、奈良県やつたからね。通われへんようになつてしもうて。ほいで弟が居てるから、私、一番長女で、弟と十五歳違つてたんですね、母は看られんでしょ。自然ともう大阪の方へ転校する手続きも取らずにね、私は、勝手に学校辞めたんです。母の看病と、弟みて、ですから、弟は私の子どもみたいになつてね。結婚した時、弟が中学の格好して訪ねて来た時はね、自分が置いて来た子、みたいな感じになつてね。せやから、私、それぐらい戦争中は、苦労しました。本当に。私と弟の真ん中に妹が二人、居てたから、本当に食料難やつたもん。もう私の困つたんは食糧難だけで、戦争の怖さつていうのは、

あまりないのよね。さつまいもの弦も食べたもん。おいしかったね。鯨の配給あつても、腐ったような感じやつたもんね。だから私、鯨、よう食べんもん。今やったら、ワンちゃんの方がいいのん食べてるわ。あの時は本当に、人間の食べるもんじゃなかったと、思うねん。

防空壕

一回疎開先から帰ったことあるのよ。そしたら父が防空壕こしらえてるのよ。それはそれで立派やと思つてたもん。終戦になつて、そのままやもん、私その防空壕で自転車の積古しててね、水溜まつてて、自転車で突つ込んで、怪我した。あそこ言うたら思ひ出すわ。

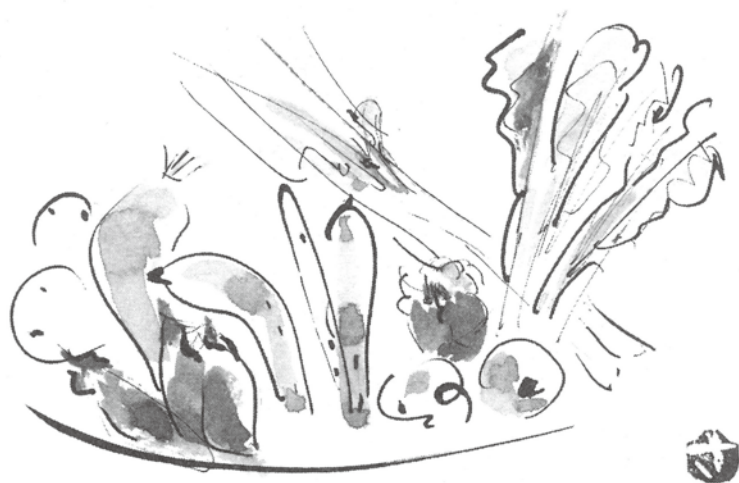
今、思う事

私ね、今、布で縫うた袋、下げんの、嫌なんよ。思い出すねん。大きいのん色々。防空頭巾、下げてね。

それと今でも、「だからためとかんと」が、一番頭の中にあつて、何かそんな癖がついているねん。それで息子に怒られる。「スーパーに行ったら、すぐあるのに、狭いところに、こんなに買うてある」つて。お米でも、まだあるのに、ちゃんと、置いておかんと心配やねんな。

この前、農業祭行って、裏に大根の葉、ものすごくほかしてあるんよ。こんなもつたないなつて、「頂いていいですかっ」いう

て取ってきましたんや。大根はまびきなでね、食べたし、なんせ畑で作つても、捨てること無かつたわね。



安宅 喜美子

ン爆弾。寝屋川市と萱島の間に着ちたんです。

京都ですからね、全然知らんねん。爆撃もおうてない。食べるもんだけは、さつまいもを、兄弟でみな、目方で計って、兄から順番に、もらったん覚えてるわ。食べ物、さつまいもとか、豆かすとかね。さつまいもの弦、あれ炒めて食べた。

爆撃はおうてないけど。話はよう聞いてた。

天井板

私が小学校一年の時ぐらいやけど、普通の家の天井に、その上に屋根の梁がある、その天井、天井板張ってあるでしょ、あれをみな突き抜けて取ってしても、なんでこんな取ったんかかって思っ。近所みな取りはって。屋根が見えるだけで、町内みな取らんとあかんかってん。その天井ね、みな取ってしもうたら、よけい落ちてくるやん、不思議でしようがない。よう分からん。

歌

(ここはお国の何百里) そうそう、その歌、歌ったなあ。

防空壕

お盆や、漆やら、防空壕へ入れてて、水溜まるねんな。湿気でみな、くずれてしもてたわ。お盆やらみな湿気で、「あーあ」言うててん。それ覚えてるわ。みんなめくれて。

爆弾の跡

爆弾の跡なんて、池になってますよ。焼夷爆弾じゃない。一ト



八重尾 光枝

私は、昭和十八年生まれですからね、何も覚えてないです。
母から聞いた話

天王寺に居て、お父さんはもう出征してたんですが、爆撃があつたんですね。子ども三人と防空壕に入つて、ちよつとだけ開けてたんですって。そしたら火が見えたんで、もうこれは逃げなあかんって、子ども三人の手引いて逃げて、ちよつと収まった時に、物を取りに帰ろうと、帰ったら、バケツリレー言うのんやつてて、全然家には近づけてはもらえなくて、で、家は全焼してました。それから疎開したのが京橋の次の鳴野だったんです。鳴野は爆弾落ちたかどうか分からないですけど、京橋の爆撃は凄かったです。んで、鳴野の家の近くに川が流れてたんです。何川か知らないですけど。それで飛行機が飛んで来て、皆がその川沿いにバーっと逃げたんですって。こう畑のあるほうに、あの焼夷爆弾が逃げる人に向かつて、バーっと落ちて来て、みんな川の中に入って逃げたらしいです。そしたら川の中めがけて、焼夷爆弾が落ちて川の中に入った人はね、みんな亡くなつたって。

食べ物

私が食べ物で覚えてるのは、おかゆでサツマイモが入ってる言うのんは覚えてるんですけどね。

大門 静子

B 29

神戸や、B 29は。爆撃ばかりちやうかつたかな？空襲警報始まつたら、お母さんに、怖い言つて、はりついてたわ。怖かつたわ。

爆弾落ちた穴

私ら怖い目してるわいな。一番最初な、焼夷弾落ちた時、仁和寺のあそこらに、落ちてん。爆弾落ちたところの穴がどんなんやつたか。ほんま怖いわ。寝屋川の仁和寺。堤防筋を兵隊さんが毎日毎日通らるんや。

淀川の堤防

堤防上がったらな、あの神戸辺り、焼夷弾落ちたん、そらもう綺麗な花火やわ。花火落ちたんみたいや。淀川の、その家と淀川とちよつと離れてるところで、そこだけ残して、淀川の筋ずつと爆撃されましたわ。

香里の工廠

挺身隊で香里の工廠へ。工場の中、白いの着て歩いてるやろ、それをB 29が見つけて、もうほんとストレスで、ビューって行つたわ。せやから。私ら、もういっぺんに、防空壕入った。入つてたけどな。せやけど、怖くてな。

主人

私の主人は兵隊にね、行ってたんですねん。ほんで私来る前に帰ってきてね、私、結婚しましてんけどね。今はけっこうです。あのやつぱり、恩給あるから、おまえは死ぬまで恩給あるからなあって、そう言うて逝ってしまいましたん。主人はほんまに、ええ人やったからね、戦争中、道で死んでる人、死んでるのに、その見てよう通らん、言うて、いつも言うてましたわ。そら、草でも、砂でも、被せてな、かけてそうしてた。まだ息あつたらな、そんなんようほつときまへんねん。ほんでもうちやんと掛けてね。ちよつとでも隠しよつとと思つて。と、言つてはつた。

食料難のたまねぎのぼん

たまねぎの種な、そら綺麗なもんやつたわ。そのたまねぎの種、それでえらい儲けはつたんや。そやけどな、種をな、ひいてな、後芽でるやろ？その芽をさし苗しとくねん。ほんで今度な、たまねぎ片づけて、その根売つてもろて、そこへ又、田植えするねん。どんだけえらかつたか、私、もう死にかけたわ。えらいことしたつて。

食べ物

私らんとこは、お米はあつたわ。瓶入れて、こうやつてつくのん。

畑

川の平地を、畑に、そないして畑作つても、えらい雨降つて、大水きたら、みな流れてもてね。



京橋の爆撃

吉川 佐喜子

私、島本やけど、覚えてる。とにかく大阪の方の空が真っ赤、んで色んな燃えカスが飛んでくるねん、落ちてくる。黒い雨言うてたもんね。これどこから来たん。って燃えカスやね。それが何の燃えカスか分かれへん。

供出

全部、兵隊さんに提供してた。金けのものは、一切家に置かれへんぐらいね。前は全部鉄鍋やったんです。それを全部、供出言うて。ほんで見に来るんですよ。中まで。台所見に来てね、そう、あつたら全部没収。ただで持って行かれてるねんな。

食べ物

こんなもん、食べて来たのっていったもん、食べて来たもんね。いっぱい入れて、色んな物いれて、お米探さなあかんぐらい、やったもんね。量増やさなね。うち、十九年に弟が生まれてるねんけど、ほんとうにお乳出なかつたら大変やった言うてました。ミルクなかつたもん。だからお米を瓶に入れて、一升瓶に入れて、私ら、ついて、そう、綺麗にして、それをお粥さんにして、おもうみたいにして、ミルク代わりに飲ませるといふか食べさせるといふそんなんして。もうそれつかされるねん。もう順番に、こう子どもが皆やらさせる。戦争中も食べ物大変やったけど、戦後も

だいぶ長いこと食べるもんなかったもんね。戦後大変やったからね。だつてご飯の代わり、お米の代わりにお砂糖配給やもん。ほんま食べるもん困ったね。だから結核の人すごく多かつたって。だから父がうちは八人家族やったでしよ。それでサラリーマンでしよ。だからとにかく栄養失調にならさへんように、それだけが精一杯や。言うてました。何かを食べさせなあかんっていう、それ言うてましたね。だから、どないして工面してはったんか知らんけど、とにかく食べさせることに一生懸命で、まあ会社がね、淀川の土手になる間に平地があるねんね、そこを全部区分けして、借りてくれて、一軒ずつ、畑を提供してくれて、そこで作ってん。畑作らしてくれて、かまどの木がないから会社が山を一山買ってくれて、一軒ずつ分けてくれて、それを取りに行く。炭なんかないから。戦後やろうね、私覚えてるのは、なんせ木を取りに行く。畑の縁ではとうもろこしを作って、おやつにして、そんな感じやったね。なんせ食べ物が大変やったなど、いうのがものすごく残ってる。だからお米洗っても、お米の粒、一粒でもこぼしたらあかと母が言うてました。大事やからって。みな、大変な思いしてきて、今は結構ですな。

兄

兄なんかは、学校かばん持って行くよりも、鍬持って行ってはったわ。ほんで何するっていうたら、国道の横にね、あの、この

ぐらいの土のところがあるんですよ。それを全部畑にして、お芋植えたりして、出来たお芋くれへんねん。みな供出やねん。全部出さなあかんねん。だから鋤持って、朝礼で並んでほんで行かはんねん。勉強する代わりに。畑つくりに行つてはったわ。校庭は真ん中だけ置いて、縁側はもう全部。土がある所はたいがい畑になってたわ。うちの学校は演習場つて言うか、こう段々畑になつていて、段々畑に、的が作つてあるねん。それをこつちから打つ練習の為に、なんか、教室を全部兵隊さんが使つてた。うち兄は足が悪かつたからね、戦争に行かずにすんでん。普通の体やつたら、行つてると思うねんけどね。

B29

とにかく国道と云う所は凄く怖いところやねん。だからB29がずっと旋回してるんやね。大阪狙つてたから。それで旋回して、トラックで走つてる人が撃たれたんや。運転手ともう一人助手がいてはつて、どっちが撃たれたんかは知らんけどね、もうあのトラックから逃げて川の、あの川があつてね、そこへ行くのに血が点々とそれ見たわ。

生活

電球はこう黒いカバーしてたね。毎日防空頭巾持たんと。いつ何時起こるか分からへんから、かぶれ言うことだな、こうやつてさげてたわ。歌とかは、軍歌みたいなん、あんなんばつかり歌わ

されてた。なんか知らんけど。とにかく兵隊さん送り出す歌とかね。校庭では、年行つた人が、長刀の練習やつてはった。

年上の学童の人

何て言うんかな、学童、年上の人達が工場へ全部駆り出されてね。私らんとこの人は、岐阜へ行つてはった。中学校の人かな、其の人らは工場にやらされて、戦死じゃないけど、亡くなりはつたん。家や国内で亡くなつた人は何の保障もない。死に損のような、そんな時代やつた。

千人針

私らは社宅暮らしやつたけどね、出征いうのは赤紙きたらすぐやねん。何日以内にここまで来い、や。日にちがない。余裕、一切なしやもんね。千人針、行く人は、もう全部貰つてはったわ。出征する時はね。千人の人にみてもらわなあかんつて。やつぱり兵隊へ行く人は、あれをお腹に巻いて守られるつて。ほんまその時、必死やもんね。お腹の大きい人はしたらあかんいうて。持つて回つてはつたから、持つていくねんね。千人にしてみらおうと思つたら、並み大抵ではないよね。でも喜んでね。自分から志願して、志願兵で行つた人もね、居てるねんね、お国のためやつたなあつて。行つてから、あの身体検査、病気で引つかかるねんね。すごい責められるねんや。お国の役にたたれへんかつたて、言うて。せやから親も嘆かほる。

防空壕

しよっちゆう、防空壕入ってたからね。おおきな防空壕やった。家の幅ぐらい。もうとにかく子ども先に入れてたから。水溜まって、うちはこれぐらいの、一斗缶かな、父が、横向きに切って、それ埋めて、そこに水上がるようにして、水溜まると、捨てる。二か所それ、作ってはってん。

勝つ

負けるっていう感覚なんて、与えられへんかった。新聞全部が勝つていう。もう、うちなんか、父が日露戦争行ってるんですよ。そしたらとにかく、日本は勝つねんって。新聞全部切り抜いて、貼りはるんです。んで、青年団の訓練に、仕事帰って来たら、行きはるねん、学校まで。ほんで鉄砲持って訓練やってはったわ。もうそれで一生懸命やもんね。自分は寒い寒いところに、戦争行って、大変な思いしてるねんけど、そんな嫌な思いしても、お国の為しか、頭になかったって、感じやね。せやけど兵隊さん、上の人に、やられるでしよ、しなかつたら、自分がやられるから、言われたとおりにせなあかんかったいうて。





(森区民センター 座談会の様子)

すみれ会のみなさん

最後に

(奥) 終戦後の子。理解出来へんやろ。なんとも思ってへんもんな。昔の話したかて、聞こうとせーへんでしょう。「こんな、あつてんよ」って言うても、「フーン」と言うて、聞けへんもんね。そんなんは、何年か前のあんたらの古い時の話やろ言うて、もう聞きませんやん。

(吉川) 映画の中でもね、テレビでも、戦争が好きやもん。好きということはな、怖さわからへんからやと、と思うで。そやから、もうな、こういう話、残して行かなあかん言うてな

(可児) そういう機会を出来るだけ設けているんですよ

(奥) そんなんは、何年か前の、あんたらの古い時の話やろ言うて、もう聞きませんやん。耳を其の方へ立てませんやん。今の子はそのものずばりで、其の時、其の時の絵を書いていくでしょ

(可児) だから広島辺りに行ったら、多分分かるんでしょね

(吉川) うん、原爆ドーム、と、資料館

(奥) せや、連れて行ったかて、入れへん言いやる

(吉川) 資料館行った時、すごく外国人が多かった。で全部、ゆつくりと、見て回っている、読んではるねんな。だから

関心持ってくれてるって、それはすごく感じて

(安宅) 修学旅行でも連れて行かれる学校沢山ありますやろ、ねえ、平和の広島とか

(玉井) 大体、十校中九校まで、広島行つてはる、って聞いてますけど、星田だけは伊勢って

(吉川) でもそれって、大事やと思うわ。私終戦後、間なしに行ってるねん。柵も何もない時、こんな目に合わされてるって、写真を、ドームの周りにぐるっと立てて見せてはるねん。広島市の役所のとこ、影そのもの、人間の形やねん。だからなにもなし、うん、影だけがあるって、なんか怖かったわ

(大門珠枝) 私、習ってた生物の先生が、広島大学へ行っておられて、原爆で、窓際の人は全部死んでしまはったけど、廊下の柱の陰で助かって、喋るたんびに、顔のあたりが、引き連れてはった。今でも生きておられるかな、とも思ひ出しますねん

(吉川) とにかく、姿がなくなってるんからね。人間の形が全くないって。

(安宅) もうなくなつてしもうてるんですって。それで家が自分とこの家が、ここらやって、分かつたらしいんです。

(吉川) なんせ、なにもなしやねん。私、広島に、おじさんおつ

てん。家なくなつて、奥さん探すのに、探しようがなく
て、広島駅にもう死体の山やねんて、その死体を、ず
っと見て回つたて。川、広島、綺麗な川あるや、そんな
川、死体の山やつたて

(安宅) すごいですよ。あれなんかよう、聞いたわ。熱いから、
そこへ飛び込みはるねん

(松宮) 今やったら、バーって出るのにな。そんなもん、だいぶ
経ってから詳しいことがちよびちよび分かつてくるね
ん

(安宅) 隠してはる人も多いよね。嫌がつている人も

(吉川) 枚方の人で、沖繩のひめゆり隊とか。話すの嫌って。と
にかく喋ったら、浮かんできくるねんて。ずっと、黙って
たけど、やっぱり、黙つてたらあかん言うので、講演を
しだした、言うてはったわ

(可児) 今から戦争が起きたら、現実に原爆とか、落とすかもし
れませんか

(吉川) 京都に落とそうかと、思ったのに広島へ、行ったんや。

(安宅) そうそう、天気が悪かつたから、晴れてないとあかんつ
て、聞いたことある

(吉川) それで長崎はなんで落としたか、ちよつと分からへんわ

(可児) あそこクリスチャンも多いのにな

(大門珠枝) 私の知り合いの方、両親とも亡くなって、んで、修道院で大きいしてもらったって。

(吉川) 戦争の犠牲者というのはすごく沢山いてはるって云う事やね

(可児) 日本人三百万人が亡くなったと聞いてますね

(安宅) 子どもさんもそうやね、鐘の鳴る丘でね

(吉川) そうそう、孤児になった人がものすごく沢山居てたから(安宅) 鐘の鳴る丘なあ

(可児) 色々、お話を伺いまして、ありがとうございます。いいお話を、沢山聞きとることが出来ました。今日は、本当に、お越し頂いてありがとうございます

終わり

『聞き取り』

日時 平成二十五年十二月二日(十三時半〜)

場所 森区民センター

出席者 奥美佐子・大門珠枝・向井悦子・松宮季子

安宅喜美子・八重尾光枝・大門静子・吉川佐喜子

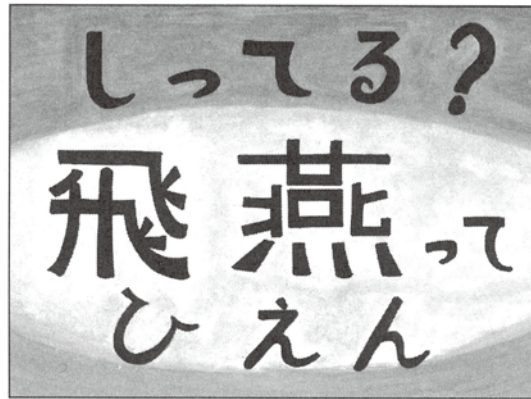
可児・玉井・森



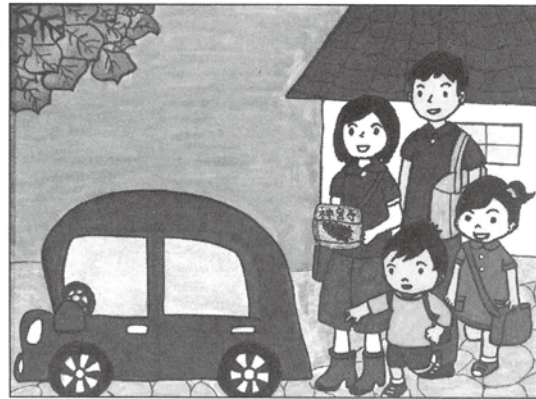
紙芝居「しってる?」

飛燕って「しってる?」について

二〇〇五年三月十六日、第二京阪道路建設現場から飛行機の残骸が出土しました。二〇一二年、交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会は、その出土品から、過去の歴史を学び、市民の方々に伝えて行きたいとの願いを込めて、紙芝居「しってる? 飛燕って」を作成しました。

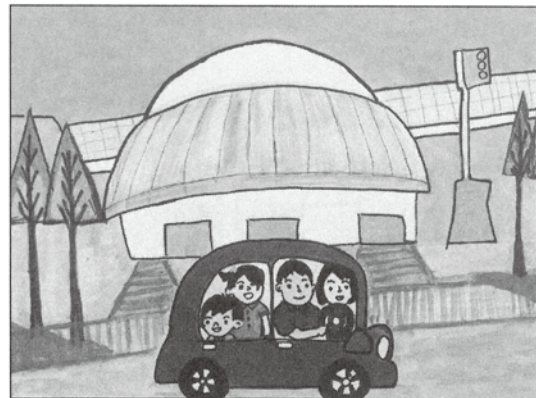


①



②

二〇一二年のある日、おや、交野さんご一家、今日は車でお出かけのようです。
「さあ、出発するぞ」
「忘れ物はないかしら」
「お土産は神宮寺のぶどうね」
「ワイワイ今日は、ドライブだ」

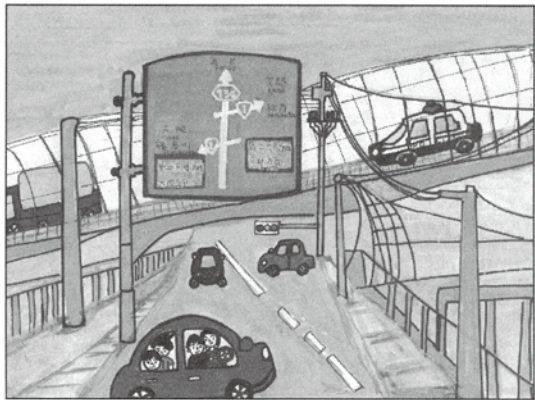


③

第二京阪道路が遠くに見えて来ました。
おや、交野さんご一家、もういきいきランドのドーム近くまでやって来ました。
「あっ、プールだ、プールだ」
「又泳ぎにいいようよ」
「そうね、そう言えば、この前、ドームのロビーで戦闘機の残骸をみたのよ、なんでも

第二次世界大戦のプロペラやエンジンだそうよ」
 「そうだね、あの第二京阪道路の下から出てきたそうだよ。又ドームに行つてよく見てみようね」

④



「おや、もう第二京阪道路が目の前に見えました」

「さあ、もうすぐ高速に入るぞ」

「便利になったわねー三十分もあれば京都に着くかしら」
 「ワイー高速。パトカーが見えたぞ」

「この道路は完成まで八年もかかったんだよ。それに工事の途中でさっきのドームに展示してある戦争の遺品も出てきたしね」
 「大変だったのねー」



⑤



時は、二〇〇五年二月、第二

京阪道路建設現場の様子です。

ガン、カツン

「おや、くい打ち作業員の方は大きな衝撃を受けたようです。」

「ストップストップ」
 「おや何か出てきたぞ」

「大変だ、何か埋もれてるぞ」
 「なんだなんだ」
 工事を中止して掘りおこしてみると、なんと、戦闘機の残骸が出て来たのです。」

⑥



「今から七十数年前、日本はいろいろな国と戦争をしていました。日本の軍国主義が行つ

た侵略戦争は人、もの、すべてが動員された全体戦争でした。

「ウーウー、空襲警報発令」

今日も、朝から警報がひっきりなしに鳴っています。頭上の空いっぱいには、B29爆撃機が編隊を組んで通過して行きます。「急いで、防空壕に避難するわよ、防空頭巾つけなさい」

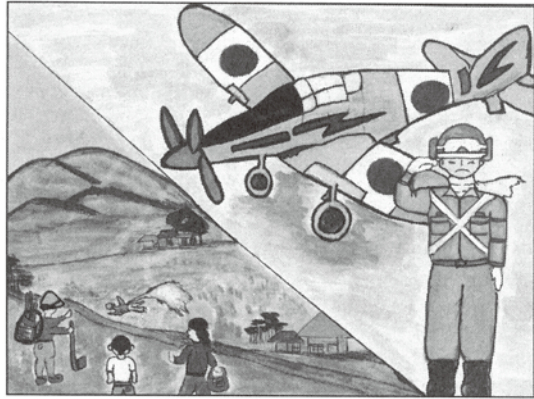
「お母ちゃん、こわいよー」

「がまんしなさい、勝つまでは。兵隊さんは夜も寝ずに戦っていらっしやるのよ」

一九四五年三月大阪大空襲、

町は丸焼けになり、黒煙は交野の方まで立ち込め、西の空は真っ赤に染まりました。

⑦



第二次世界大戦末期七月硫黄

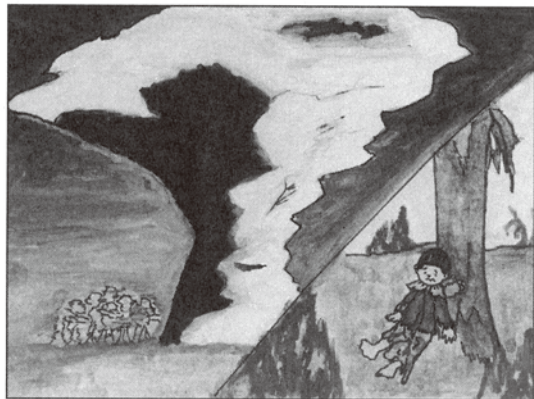
島から六十機の米戦闘機 p5

1大阪上空に飛来。

「敵機接近、ただちに交戦に向かいます」

中村純一中尉ら十七機の戦闘機飛燕は、伊丹飛行場を飛び立ち交戦するが、すべて撃墜されました。交野上空で戦った中村中尉は落下傘で脱出す

⑧



るも、敵機の翼でひもを切られ星田水田に墜落死しました。機体は水田に突っ込み機首は地中にめり込んでいます。「大変だ。みんなで遺体を引き揚げるぞ」

「川できれいに洗ってあげましょう」

星田の村民は遺体を川で洗ひ清め、お寺でお通夜を行いました。手厚く弔い、軍隊に引き渡しました。



アメリカのB29戦闘機は東京、大阪などの大都市を焼き尽くし、日本に降伏をせまりました。日本は戦う力はなく、女、子どもまで、一億総玉砕を叫んでいました。一九四五年八月六日

「ピカッ、ドーン」

アメリカは広島に世界初の原子爆弾を投下。続いて八月九日 長崎に。

一瞬にして、巨大な火の球は、町も人も地獄へ落とし入れました。広島は死者約十四万人、長崎約七万人。

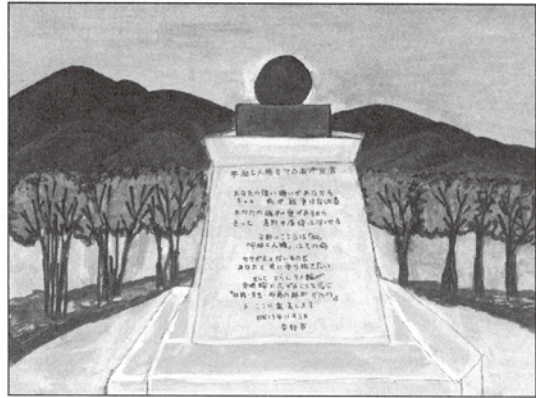
「あついよう、み、みず…」
「がまんしんさい、みずをのむと、死ぬけん」

八月十五日 天皇陛下の玉音放送

「しのびがたきをしのび、たえがたきをたえ…」

日本はポツダム宣言を受諾、無条件降伏し、戦争は終わりました。

⑨

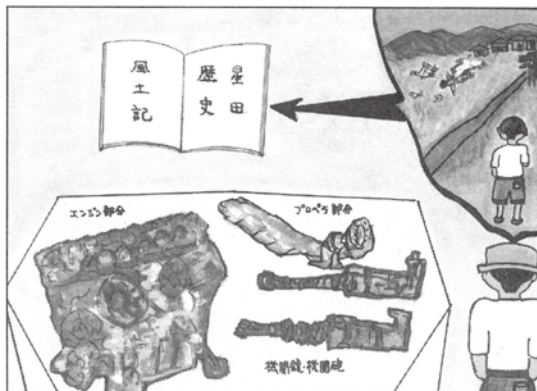


あれから半世紀あまり。平成十三年十一月三日交野市は「平和と人権を守る都市宣言」をしました。

「あなたの強い願いがあるから、きっと、核や戦争はなくなる。交野のこころは「和」かけがえのないものを、あなたと共に守り抜きたい」

ドームの石碑は今日もみんなに語りかけています。水と緑あふれる星のまち交野で、戦争を知らない世代に平和と命の尊さを語り継ぎたいと。

⑩



「終戦当時私は、小学生でした。現場の水田に行くと、パイロットが横たわって死んでい

るのを間近に見ました。あの時の飛行機が見つかるなんて、驚きです」

二〇〇五年三月のどかな田園風景に現れた、第二京阪道路の下から見つかった戦争の傷跡。戦闘機飛燕の出土品は、いきいきランドに展示され、星田歴史風土記に記載されました。現在、平和教育の一環として使用されています。



⑪



夕暮れ近く、天の川のむこうに第二京阪道路が見えています。今日も沢山の車が走っています。おや、交野さんご一家、ドライブからお帰りのようです。「ワイイ、緑地公園だ」「ジョギングの人でいっぱいだね」
「みんな楽しそうねえー」

公園は子どもも大人も笑顔であふれています。

「今まで交野にそんな戦争の歴史があつたなんて、知らなかったわ」

「過去の歴史を忘れないために、交野市にも平和を考える日があればいいね」

そうです。第二京阪道路建設現場から掘り起こされた戦争の爪痕を、交野の歴史に残し、命の尊さと、平和の大切さを次の世代へ受け継いでいきたいものです。



⑫



四月、春の訪れとともに交野の里は、さくらで埋め尽くされます。満開のさくらで平和な交野のまち。私達「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会は平和の日制定を目指して動き出しました。平和の尊さをお互いに確かめ合い、未来につなぐために、交野市にも平和の日を制定し

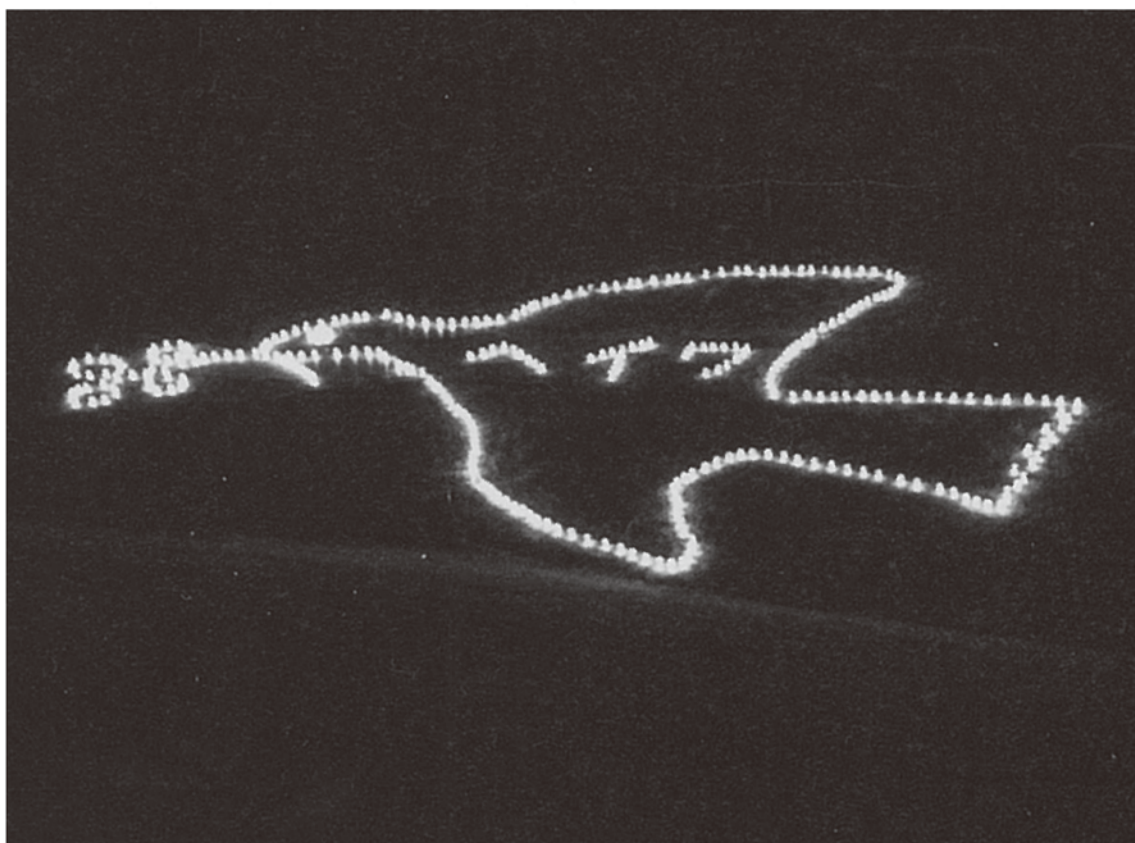
ていきましよう。紙芝居、これで終わります。



平成26年度 かたの平和祈念事業から



親子参加の「平和の輪のお菓子づくり」（5月）



織り姫の里天の川七夕まつりでの「平和祈念キャンドル」（7月）

交野の平和と戦争関連モニュメントから



平和の鐘 (いきいきランド前広場)



「平和と人権を守る都市宣言」碑 (いきいきランド前広場)



戦闘機「飛燕」発掘物展示 (いきいきランドロビー)



中村中尉鎮魂碑 (星田北6丁目)



片町線陸軍専用香里側線跡 (星田北)



私市興亜拓殖訓練道場跡 (大阪市立大学理学部附属植物園)



桂木斯小学校記念碑 (平和台霊園内)



忠魂碑 (私部会館横)



交野市原爆被爆者の会「祈念」碑 (ゆうゆうセンター前庭)



「愛と平和」碑 (ゆうゆうセンター前庭)

平和と人権を守る都市宣言

あなたの強い願いがあるから
きっと 核や戦争はなくせる

あなたの暖かい愛があるから
きっと 差別や虐待はなくせる

交野のこころは「和」
「平和と人権」はその命

かけがえのないものを
あなたと共に守り抜きたい

そして さらにその輪が
全地球に広がることを念じ
『非核・共生・非暴力都市 かたの』
をここに宣言します。

平成 13 年 11 月 3 日

交 野 市

City Declaration on Observance of “Peace and Human Rights”

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is “WA” or “Peace.”

The desire for peace and the respect for human rights are at
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby
declare Katano to be a
“Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity.”

November 3rd, 2001

City of Katano

Translation: Multilingual Center, FACIL (NPO)

あとがき

「平和の礎」の初刊から十年の歳月を経て、第四集を発刊することができました。

くしくも今年、あの悲惨な敗戦から七十年の節目を迎えます。戦中、戦後の苦しい体験を語ってくださる方も少数となり、原稿を頂くことも困難になってきました。

これから如何にして、決して忘れてはならないこの体験記を伝承していくか私たちの責任を感じます。

ご協力いただきました皆様ありがとうございます。

(水上 記)

編集者 平和継承事業部会

編集委員 可児 義明

水上 隆邦

住井 麗子

玉井 八恵子

仲谷 紀子

(市) 人権と暮らしの相談課

交野市天野が原町五丁目五番一号

電話〇七二一八一一七〇九九七

「平和の礎」
いしすえ

— 交野在住者の戦争体験集第四集 —

平成二十七年三月発行

発行者

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

交野市私部一丁目一番一号

電話〇七二一八九二一〇二二二

印刷 桃園印刷所

枚方市野村元町七番一号

電話〇七二一八五八一八二五四